

Chap. 10: Naked, Poor, and Mangled Peace: Its Desirability and Fragility

(143)

本章の問題「平和はいかなる状況で保たれるのか？」

平和が持続した事例というのはほとんどないので、この問題を明らかにするのは難しい試みである。

(1) Attitudes toward War and Peace (戦争と平和に対する人びとの姿勢)

・どんな社会でも武勇は賞賛されるが、戦争は勝者にすら大きなコストを強いるので、武勇への賞賛は手放してなされるものではないし、かすかな嫌悪を伴うものですらある。

(144)

・例えば、敵を殺害した兵士が「汚れており、浄めを必要とする」という考え方は、世界中に共通にみられる(ニューギニアの Huli をはじめ多くの例)。

・戦争好きとされる社会ですら、最高の戦功者を最高の政治的地位につけることはない。そうした地位につくのは、(勇敢であることが期待されるとはいえ)弁論、富の獲得、寛大さ、交渉術、儀礼の知識などに長けた者たちである(西アパッチのヘッドマンに期待される資質の例など)。

(145)

・男性に比して戦争による女性の利益は少なく不利益は大きいので、女性は戦争を嫌う。普遍的ではないが(Tupi や Carib の女性が捕虜を虐待する事例など)、女性の政治的権限が軽視されるような状況では、女性は戦争を悪とみなすのが普通である。

・戦闘的な兵士ですら、戦争が悪であることを理解はする(仕方がないのだと言う)。

・戦争より平和を好むことが普遍的であるもうひとつの証拠として、戦闘好きな部族社会も、ヨーロッパとのコンタクトや平定によって平和な社会になるということがある(ニューギニアの Auyana の語りの事例など)。

(146)

・ニューギニアの Auyana や Tauade の人びとが見る悪夢(戦闘中に孤立したり追い詰められたりする)は、アメリカ人の戦闘ノイローゼの徴候に共通するものがあり、未開・文明を問わず、戦闘に対する恐怖はトラウマになりうるものであることを示している。

・残虐行為をおこなうには、特別な鼓舞が必要な場合がある(タヒチの戦闘中の慣習の事例)。

・神話のなかで戦争の起源が説明されることは多くとも、平和の起源についてのものは非常に少ない。これは戦争には言い訳が必要なことを示していると考えられ、どんな人びとにとっても平和はノーマルで戦争はアブノーマルであることは明らかである。

(147)

・こうした戦争に対する普遍的な嫌悪が社会行動に何らかのインパクトをもつならば、戦争はまれで平和は常態のはずなのに、現実とは逆である。

・しかしこうした状態がパラドックスであると考えるのは観念論である。マテリアリストにとっては、価値や信念は上部構造にすぎない。戦争と平和のルーツは明らかに社会経済状況にあり、価値や信念はそれらの上ののっかっているのである。

(2) Making Peace (和平)

・部族の戦争で最もよくある解決方法は、一方のリーダーが停戦を申し入れ、相手が受け入れるというものである。この場合、提案に引き続いて贈り物の交換をしたり賠償しあったりする。しかし戦争が袋小路に陥ったり、損害が同等でもない限り、停戦交渉に互いの同意が得られるのは困難である。

(148)

・ニューギニアの Central Enga の停戦プロセスの事例をみても、小規模社会において平和をつくりだすのがいかに難しいかわかる(政治的リーダーの提案、戦闘員・遺族の反発、第三者をまじえた停戦会議、だまし討ちへの恐れ、もっともらしい停戦のための言辞の必要、賠償の支払いと遺族への公平な分配)。

(149)

・エンガの例もそうだが、平和の手段であるはずの賠償という方法は(きちんと支払われなかったりした場合)引き続き戦争が起こる原因になりうる。加えて、停戦後に戦傷者が死んで、それに対する賠償要求が拒否されたりすることもしばしばある。

・賠償以外の手段はますます効果がない。オーストラリアの Murngin は様式化された決闘によって停戦しようとするが、かえってあらたな戦争の原因になりやすい。

・ベルサイユ条約のように、紛争解決が不満を生みあらたな戦争の種になったりすることは部族の戦いでも多い。

・人民や経済資源に対する集権化されたコントロールがあるため、国家は無国家社会よりも停戦には若干有利である。政治決定が少数者にゆだねられるため、全市民や兵士に対する完全なコンセンサスが必要ないので、平和を強いるには都合がよい(もちろん野心的な支配エリートが戦争をはじめたりということもある)。

(150)

・帝国主義の正当化のひとつに、部族間戦争の「平定」というのがあった。

(3) Maintaining Peace (平和の維持)

・Gregor は、最も平和な社会の多くは海洋、乾燥地、山岳地帯、スワンプ、森林などの孤立した人口過疎地にすむことで部族間の紛争から逃れることができる社会であると述べる。しかし多くの社会ではそんなことは不可能である。もっと興味深いのは、異なる集団の交渉が日常であってなおかつ平和が持続する事例だろう。

・Gregor はそうした事例としてブラジルのシンゲー川上流盆地をあげる(4つの言語グループから成る 10 の村に 1200 人くらいの人 がすみ、ほぼ 100 年以上戦争や侵略がない)。しかしこれも「敗走した避難民」の可能性もあり、特殊な地理的条件のおかげで平和を保っているように見える。

(151)

・シンゲーの事例は、ある種の独占交易が平和を推進したりその兆しとなったりすることを暗示している(誰でもアクセス可能な資源であるにもかかわらず、その産品が村ごとに独占的につくられ交換されていること)。

・オリノコ川上流のヤノマモの独占交易も類似の事例だが、これは同盟関係が壊れると、相手の産品を自分たちも作ったりする。したがってこの場合の独占交易は平和の結果であって原因ではない。

・独占交易の先史的な事例としては、ベルギーの初期新石器の農耕民(彼ら是要塞をつくっている)の事例がある(石斧、石刃、皮製品などの製作が村ごとに専門化し、交換される)。

(152-156)

・先住民と植民者との関係が合州国、カナダ、メキシコで全く異なった(カナダでは比較的平和が保たれた)のはなぜか。それぞれの政府の先住民に対する対応が違った(先住民に対する補償の仕方や司法の公正さなど)。「カナダ政府は西部地域を植民者よりも早く獲得した」

・19 世紀カナダの事例とシンゲーの事例に共通項を見つけるのは難しい。共通する特徴は、「実際に平和が達成された」ということのみ。

・両者の事例からただひとついえることは、民族間の調和や異文化を認めることが平和の前提条件ではないということである。民族間の平和に必要なのは、互いにささいな違いに対して寛容であることである。(「間違っただけのいいマナー」)

(157)

・以上の事例から、平和には(戦争と同様)政府が必要であるということである。

(4) The Irrelevance of Biology (生物学的要因は重要でない)

・人間のほとんどの活動は、いかにベーシックなものであろうと、集団の協力を含む。暴力も集団の協力を含む。

(158)

・人間の行為はきわめて可塑的であるが故に、生物学による説明は困難である。人間行動は学習と意思決定によって形成される。数世代、ときには同じ人間が平和的・戦争好きの性質を変えてしまうのも、好例である。多くの社会では、仲間内では非暴力的な一方、外部者には暴力的である。多様な人間行動を1世紀にわたり説明してきた人類学者にとっては、人間生物学は宿命というよりは存在しないようにみえる。

(159)

・人間はコンピュータと同様、戦争・平和行動が可能なハードウェアとして持っていたとしても、プログラム(学習)や適切な刺激がない限り作動することはないのである。

(5) Why War and Why Not Peace? (なぜ平和でなく戦争を選ぶのか)

・戦争が存在する社会的理由のひとつとして、平和のコストが高すぎる時がある、というのがある。

・なぜ若者が戦争に際して最も攻撃的になるかということの説明として、彼らが戦争によって得るものに対して失うものが少ないということがある。

(160)

・地域的に平定がすすんでいる状況というのは、戦争と平和にコスト・ベネフィットが役割を果たすもうひとつの領域である。

・しかし、コスト・ベネフィットだけで説明できないのは明らかである。

・そのひとつには、(権力がない、仲介者がいないなどの状況により)平和を確立することが難しいということが含まれる。

(161)

・しかし仲介や強制の制度(リヴァイアサン)をつくっただけでは平和を維持するには不十分である。平和でいることの報酬(生活の保障)を与える必要がある。

・戦争と平和はどのようにして決まるのか? 戦争が起こる条件は時と場所と文化によって異なり、普遍的に適用できる答えはない。

Chap. 11: Beating Swords into Metaphors: The Roots of Pacified Past

(163)

本章の問題: アカデミックな世界において、「先史時代の平和」という妄想はなぜこれほど広がっているのか?

これらは、アカデミックな人類学の外部の出来事に見られるはずである。

(164)

(1) Seeing the Elephant (ゾウを見る)

・「平和化された過去」の起源は、第二次大戦直後に遡る。

・ヨーロッパにとってその領土の大部分が戦場になったのはナポレオン戦争以来のことであったため、第二次大戦は彼らにとってトラウマとなった。

・ふたつの大戦の間の時期に文学作品に描かれた戦争は冒険、ヒロイズム、栄光、または叙事詩的な悲劇であったのに対し、最近50年ほどの間に一変し、超現実主義のブラックコメディになってしまった。

(165)

・アカデミックな世界でも、20世紀半ば以降、主要な大学の歴史学者は軍事史を扱わなくなった。文学の世界で戦争がばかげた悪夢として表象されるようになったように、軍事史はアカデミックな関心から消え、少数の州立大学教授や軍事学校やアマチュアの

世界にのみ見られるような、格下げされたものとなった。

・新たに発見された戦争の狂気は、キノコ雲に象徴される核戦争である。文学に描かれる核戦争の結末は、石器時代に戻ったり、悪夢のような突然変異種だとか、ようやく生き延びたちっぽけで貧しい部族生活といったものである。戦争は愚か・残虐というよりは狂気の沙汰となり、考えること自体が呪いのようなものとなった。

(166)

(2) The End of Imperialism (帝国主義の終わり)

・ホップズの未開観はヨーロッパの植民地主義、帝国主義にとって都合が良かったので、19世紀はじめ頃までには支配的な考え方となった。19世紀末までにはさらに変容して、「劣った種」に対して平和と文明の恩恵を受けるといふ、信心ぶった「白人の重荷」という考え方になった。

・しかし19世紀後半期には、社会学者と人類学者は、ホップズの注意深い議論とはかなり異なったネオホップズの観点、すなわち社会ダーウィニズムとレイズムをつくりだした。スペンサーの「適者生存」に代表される考え方は、西洋文明とヨーロッパ人が他の文化・人種を犠牲にして拡散することを正当化し、こうして帝国主義者は劣った人びとから世界の支配を強奪することに対する倫理的義務と生物学的権利を発見した。

・ヨーロッパが非ヨーロッパ世界に対してやってきたことを、第二次大戦のナチスがヨーロッパに対して、さらに効果的かつ残虐におこなった。これによって帝国主義は高貴な改革あるいは自然法則のあらわれどころか、諸悪の根源のようなものとなった。

(167)

・戦後の脱植民地化もまた、ヨーロッパのインテリの重荷となった。帝国の消滅によってこれまでのような言い訳や自己非難の必要はなくなり、また実質的にヨーロッパそのものが米ソ大国の半植民地のような状態になったこともあり、非ヨーロッパとの同一化が知的ファッションとなった。

(3) The Disappearing Primitive (未開の消滅)

・米国東部人にとってかつては憎悪の対象であった西部地域の先住民は、大勢が決してリザーブに閉じこめられるようになった19世紀後半期には、逆に感傷的な共感の対象となった。

・このように、時空間的に距離が大きくなるにつれて憎悪がノスタルジーに変わる例は合州国に限らない。ドイツ人とカエサル、オーストラリア先住民と移民系オーストラリア人、ブッシュマンとポーア人、アイヌと大和人など。

(168)

・非文明的な生活様式の消滅は6000年前の都市の発展にはじまるものの、部族社会の人びとの文明経済への取り込みは第二次大戦後決定的に加速した。こうして1960年代後半までに未開世界は消滅し、観察者の感傷的な視点が否定されるような場面もなくなった。

(4) The Fading Hope of Progress (進歩への幻滅)

・第二次大戦のショックや帝国主義の悪に気付いたこと、さらには後にエコロジースの感性が広がったことなどによって、進歩と繁栄という西洋の神話は全てむしばまれてしまった。

(169)

・皮肉屋がいうように、最も「進歩」による恩恵を受けた第一世界の人間ほど、その「進歩」を軽蔑する。これは西洋が享受するもうひとつの贅沢というべきものである。第三世界では西洋の教育を受けたエリートをのぞいて、同様の考え方を見いだすのは難しい。ニューギニアのカーゴカルトにあらわれているように、第三世界の人びとは豊富なモノやその他の文明の快適さを強く欲しているのである。

・進歩や文明の悪のほとんど(社会的不平等、従属、殺人、窃盗、レイプ、蛮行、征服)は戦争行為やその結果に集中的にみられるため、ネオルソー主義的世界観においては、戦争は西洋の進歩の産物であって、そうすると逆に非西洋は牧歌的で平和的であ

るに違いないということになるのである。

(5) The Creation of Myth (神話の創造)

・人類学者は以上のような西洋文明のムードに合致するような未開の戦争や先史の平和に関する学説をつくりあげたが、それらは純粋な想像ではなかった。利用可能な証拠を採用したのだが、それらは、例えば実際には相対的に重要でない「様式化された戦闘」を強調したりするような、都合の良いやり方だった。また先史時代の平和については、実際には存在する証拠を無視したり、その一方考古学者は同様に先史時代の暴力に関する諸問題を無視することによって、「過去の平和化」に貢献した。

(170)

・こうした人類学者による解釈は、時代の空気によるバイアスをうけたものといえる。科学は根っこの部分では価値から独立に存在することはできないので、時代の流行やバイアスの影響を受けることは仕方がない面もある。

・しかしそうした流行のうち非難されるべきは、ネオホップズにせよネオルソーにせよ、彼らが部族社会の人びとの全体的な人間性を否定していることである。前の時代には非文明世界の知性や社会性を否定し、いっぽう現代では、部族社会の人びとの強欲さ、残虐性、生態系に無頓着であること、マキャベリの狡猾さなど、我々と同様に彼らが持っている性質を否定しているのである。

Chap. 12: A Trout in the Milk: Discussion and Conclusions

(173-175)

・人類学と考古学によって発見された事実から、戦争は未開だろうと文明だろうが、木の槍で戦おうがナパーム弾で戦おうが、同様に恐ろしく効果的なものであることが示された。

・「総力戦の発見」(ナポレオンや南北戦争のシャーマン、グラントなど)と歴史家が言っているようなことも、極東やアフリカやアメリカ大陸をヨーロッパ人が発見したという言い方と同様、一面的である。シャーマンやグラントの発明したとされる消耗戦も、敵の家畜や作物を破壊したり家やカヌーを燃やしたりという形で、世界中の小規模な社会において常におこなわれてきたのである。

(176)

・西洋の国々は、ローマの没落の後、徐々にそのような総力戦的な形式を失い、武装した貴族、傭兵、後には職業軍人など、限られた人間によるピュアな戦争を好むようになった。その間、ヨーロッパにおける戦争は「チェスのようなもの」だったのである。

(177)

・戦争の原因や平和の維持についても、国家と無国家社会の間に違いはない。唯一の違いは、後者の戦争においては他の社会を従属させるために戦うことはないということくらいである。部族やバンド社会は従属のための制度を持っていないので、これは驚くに値しない。

・驚くべきこととして、戦争が頻発することとその社会の人口密度との間には直接的な関連がみられないこと、また交易や通婚が盛んな状況でかえって戦争が起りやすくなることがある。また予想通りのこととして、好戦的な集団がいるところで集団間の戦争が刺激されやすいこと、災害にみまわれる困難な状況下で戦争が起りやすいこと、などがある。

(178)

・しかし視点をかえると、いかに戦争が普遍的であっても、いかにある集団が好戦的であったとしても、戦争をしている時よりしていない時のほうが長く、また戦争によらない活動(食糧生産や交易)がない限り、どんな社会も生き延びることはできないということである。ルソーの未開観が空想的だとすると、ホップズの永遠の闘争はそもそも不可能である。

・戦争の結果は重大であるが故に、人間の存在にとって必要でないかもしれないが、きわめて重要なのである。

(179)

・未開の戦争に関する神話は、学問的にはもちろん、倫理的にも非難されるべきである。

・なぜなら未開を善、文明を悪と描くのは、間違っているばかりでなく偽善である。ノスタルジストは未開を褒め称えても決して文明

を棄てて彼らと一緒に暮らしたりはしないし、代わりに石油文明の恩恵によってできたステレオで自然賛美の音楽を聴いたりしているのである。未開、文明どちらをすぐれたものとして見る神話でも、それらは人類の知的、心理的、生理的な等しさを否定しているのである。

(180)

・人類学者は 20 世紀の間、人類の心的斉一性について議論してきた。すなわち、人類はみな、同じ生理学的・心理学的・知的基盤を持っているというものである。人類学者は複数の社会・文化のなかにみられる技術、行動、政治組織、価値の多様性は生態や歴史、その他の物質的・社会的要因によって説明されると考えてきた。こうして、少数の例外を除いて人類学者は文化の多様性や文化進化を論ずるのに非遺伝的な要因を重視してきた。人類の心的斉一性はただの理論ではなく事実であり、戦争のような陰気なトピックの調査によってすら認められるものである。

・本研究でわかったことは、我々に次のようないくつかの有益な教訓を与える。

・(1) 交易を紛争の発生源と考え、交易相手とは特に注意して接しなければならない(日本の事例)。

(181)

・(2) 軍事的安全保障を求める際には、厳密な軍事技術よりもむしろ経済的・平和的技術の発展に力を入れたほうがよい(第二次大戦や湾岸戦争の事例)。

・(3) 敵対する民族的・部族的集団ごとに領土をわけるよりは、できるだけ大きな社会的・経済的・政治的単位をつくった方がよい(ソ連、ユーゴ、ソマリアの例; スペインの成功例)。

・(4) 考古学者が生産・解釈する物的状況証拠の重要性(目撃証言よりもはるかに重要である)。

(182)

・どんな目撃証拠もうそやまやかしたと最もらしく言うことができるが、それでも犠牲者の体に埋め込まれた鏃を無視するのは難しい(カスターの敗戦に関する考古学者の功績)。

(183)

・考古学者の状況証拠は今のところ人類の深い過去を知る唯一の方法なのに、考古学者が先史時代の戦争や暴力についてほとんど考えないのは恥である。またそれによって、先史時代のある地域・場所では数世代にわたって平和な時代が続いたケースもあるのに、戦争に注意を向けないことによってその発見を隠蔽してしまう結果にもなっている。

・本書は状況証拠をさがすための長い試論であった。

(コメント)

・Chap. 10-4 で論じられている「生物学的要素は関係ない」という下りは、典型的な「標準社会科学モデル」の踏襲といえるが、とくに Chap. 11 から結論部にかけて人類の普遍性を強調している論旨と矛盾している(おそらく気付いていないだろうが)し、この部分だけ見てもおかしい(彼が人間に固有の特徴とみなしているものは、人間生物学からみれば進化理論から妥当な説明が可能と考えられているものである)。

・コスト・ベネフィットによるパシフィケーションの説明は妥当と思われる。

・Chap.11 の部分はオッターバインのキーリーに対する批判に該当する個所と思われるが、一読したところでは、オッターバインの「平和な未開人神話」の根本は戦前の進化主義にあった」という批判はあたらぬのでは?と思われた。なぜなら、キーリーは 19 世紀的な進歩主義による未開観も、戦後の楽園的な未開観も、未開人のトータルな人間性を否定するものとしており、オッターバインの趣旨と矛盾しないように読めるから。

・本書全体としては、民族誌的資料を十分に検討しながら未開と文明の戦争について論じた貴重な研究といえるが(戦争研究に関するレビューとしても使えるところは多い)、多くの著作に共通するものとはいえ、結論で述べられている「教訓」はかなりおそまつなものである。